



徒魔の手記



生い立ち編

宮崎文敬



הילדה והילד
היו מאוהבים
והוא היה
הולך איתה
בכל יום
והיא הייתה
מחיימת
בכל יום
והוא היה
מחיימת
בכל יום

הילדה והילד
היו מאוהבים
והוא היה
הולך איתה
בכל יום
והיא הייתה
מחיימת
בכל יום
והוא היה
מחיימת
בכל יום

僕の素顔の肖像画（上の挿絵）は、この世に1つしかない。
でも僕が描いたんじゃなくて、師匠が描いた。
まるで子どもが描いたように見えるかもしれないけど、師匠は大人だ。
師匠は良く言っていた。

「ブサイクな奴は自分を描くな。やたら美化したがるのが気に入らない」

だから、僕の自画像は師匠が描いた。
今なら少しわかる。
だから僕は、今まで一度も自分の自画像を描いたことがない。



師匠の肖像画（上の挿絵）も、この世に1つしか残っていない。

ただし、それは僕が描いた。

師匠は、自分の顔や姿を他人に記録されるのを嫌った。

だから、師匠を描いた肖像画は他にもいくつかラフがあったけれど、ほとんど師匠に処分されてしまった。

唯一残った肖像画は、師匠のスケッチ画から絵画に起こしたものだ。

師匠が書斎で勉強中に、後ろからこっそり描き留めたのだ。

完成したのは、僕が師匠から独立して、さらにもう少し経った後のことだ。

でもそう言えば、師匠をコミカルに描いた漫画っぽいのは、何点か残ってたと思う。

僕は、とある離れ小島で生まれた。

ある日、島は天変地異で一夜にして沈んだ。

そこに住んでいた人たちは、ほとんど全滅したらしい。

”らしい”と書いたのは、僕と両親がその時は大陸に出稼ぎに行っていて、伝聞で知ったからだ。

命は助かったけど、僕と両親は生活に困った。

その時に、師匠に出会ったんだ。

「おもしろい顔だ」

それが、小さかった僕の顔を覗いて、師匠が最初に行った言葉。

失礼だと思うけど、両親は抗議しなかった。

大金で僕を買ってくれたから。

責めることはできない。

明日生きられるかどうか、それすら分からなかったから。

師匠は、世界中に知れ渡っていた、有名な魔法使いだった。

今でも、遠い異国にある図書館の書庫にある、ホコリだらけの書物の中に師匠の名前を見かけるからだ。

でも師匠は、僕と一緒にいる間、自分の事を自慢しなかった。

そして、とても変わり者だった。

- 1、滅多に外出をしない。
- 2、外出する時は仮面を被り、それを滅多に外さない。
- 3、他人との会話が、いつも横柄。
- 4、何かを頼まれると、いつも大金をふっかけて、タダで仕事をしない。

面と向かって悪く言う人はいなかったと、師匠は豪語していたけれど、陰じゃボロクソだった

と思う。

師匠の評判が待ちなおしたのは、師匠がいなくなってからじゃないかな。
よくあることだけど。

意外だったけど、師匠は僕を冷遇しなかった。

なぜなら、僕はマスコットだったのだから。

例えば、珍しく師匠が外出したとする。

そして家に戻ってくる時は、必ず不機嫌になっている。

そんな時、師匠は必ず僕の顔を覗きこみ、大笑いするのだ。

笑って、わらって、軽く咳き込む。

そうやって、師匠は嫌なことをみんな忘れていたようだ。

こんな僕を気に入ってくれたのか、師匠は僕が魔法を覚えることを許してくれた。

ただし、自分から魔法を教えてくれたことは一度もなかった。

僕が師匠の真似をして、魔法の書物を詠唱したり、魔方陣を描いたりすることを、黙認してくれたのだ。

もちろん、失敗した時は怒られた。

でも血相を変えてやってきた師匠は、僕の顔を見てまず吹き出す。

そして失敗の後始末をしてから、ようやく僕を叱った。

だから、師匠から暴力を振るわれたことは一度もなかった。

ぜいぜい、デコピン程度だ。

これは、今となってはとても良かったことだったと思う。

師匠と苦楽を共にして10数年、僕は多くの魔法を覚え、使いこなすようになっていた。

そして、遅い思春期を迎えたある年に、師匠に連れられて、とある場所にやってきた。

それは、人里離れた森にある、古いお城（下の挿絵）だった。



お城は師匠が若い頃を買ったらしい。

でも、別荘として使うには周りが殺風景で、しかも城の管理が大変だった。

この2つの理由で長らく放置していた物だった。

その割には部屋の様子が小ギレイだったので、質問をすると大掃除をしたからだと言われた。なぜ今頃になって？ と考えてから、ハッと思い当たった。

「ここに住めと言うのですか？」

「察しが良いな。荷物は、もう運んであるからな」

僕は、ある日突然に独立することになったのだ。

城の中を案内されると確かに、生活の場所や修行をする場所には必要品が全て揃っていた。

中でも、書齋に師匠が愛用していた魔法の書物が、本棚いっぱいには並んでいたのにはビックリした。

「師匠が大事にしていた本じゃないですか!？」

「そうだ。俺にはもういらぬ物だから、おまえにやるよ」

”いない”とはどういう意味だろうと、僕はその時に漠然と思った。

この答えを知ったのは、随分と後になってからだ。

師匠は、僕と別れる時にプレゼントをくれた。

僕の背丈に合った、師匠そっくりの仮面と黒衣の衣装だった。

「おまえの顔は、人さまに見せる仕様じゃないからな」

ひどい言いぐさだと抗議しようとした僕に、師匠はこう付け加えた。

「その顔を見せられる、良い相手を見つけろよ」

今思えば、師匠なりの助言だったのかもしれない。

『素顔を晒すのは勇気が要る。笑われても傷ついても、後悔しない強い心を持って』

……実に都合の良い解釈だけど、僕はそう思うことにしている。

師匠が立ち去ってから、僕はこの城に住み続けている。

ちょっと短いけど、僕の生い立ちはこんな感じだ。

最後に、師匠が別れ際に言い残した、4つの言葉を書き残しておこう。

- 1、魔法は人を幸せにすることが出来ない。
- 2、魔法は人の幸せを助けることしか出来ない。
- 3、魔法を使う者は自身を幸せに出来ない。
- 4、魔法を使う者は誰かの幸せを見守ることしか出来ない。

生い立ち編、おわり

徒魔の手記

<http://p.booklog.jp/book/82210>

著者：宮崎文敬

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/batigainahito/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82210>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82210>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ